

主 題：パウロの最後の言葉

聖書箇所：テモテへの手紙第二 4章 6－8 節

パウロの今、過去、未来を通して、私たちの信仰の歩みを吟味しましょう。

きょうは皆さんとパウロの書いた13の手紙のうち、最後の手紙であるⅡテモテから学んでいきたいと思えます。パウロはこの手紙をローマの獄中から、愛する子テモテに書き送ります。自分の死が間近に迫っていることを知ったパウロは、この愛する子テモテにどうしても会いたかったので、この手紙の中ですぐに自分のもとに来てくれるようにと頼んでいます。そのような状況の中で書かれたこの手紙の最後の4章は22節からなっています。

さて、皆さんは自分の信仰の歩みを考えたとき、今の自分、過ぎ去った過去の自分、そしてこれから訪れる未来の自分をどのように見ておられますか？あの偉大な使徒であったパウロもこの手紙の4：6－8で、今の自分、過去の自分、そして未来の自分について書き記しています。私たちはきょう、このパウロの今、過去、そして未来を通して、私たちの信仰の歩みを、もう一度吟味してみたいとも思っています。きょうのテキストであるⅡテモテ4：6－8をお読みします。

Ⅱテモテ4：6－8

「：6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。：7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。：8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」

1. パウロ—今の自分— 6 節

まず、パウロは6節で、今の自分について述べています。この6節では、パウロは今の自分について二つのことを書き記しています。一つは「私は今や注ぎの供え物となります。」もう一つは「私が世を去る時はすでに来ました。」です。これが、パウロが今の自分を見て書き記していることです。一つずつ見ていきます。

①私は今や注ぎの供え物となります。

まず、「私は今や注ぎの供え物となります。」を見ましょう。旧約では、祭壇にいけにえをささげる時に、聖別のしるしとしてその祭壇にぶどう酒を注ぎました。注いだそのぶどう酒のことを指して、「注ぎの供え物」と言いますが、そのことは民数記15：10をまた見ていただけたらよいと思えます。ここでパウロは、自分の殉教を指して「注ぎの供え物」と述べています。「その殉教の時が今まさに来ました」とパウロは言っているのです。パウロは自分の主をはっきりと見てとっていたのです。考えてみると、パウロは救われたその時から、あらゆる自分の持ち物、それは時間やお金、また学問やからだ、思い…そのすべてを神にささげてきました。パウロに残されていたものは、パウロのいのちだけでした。そしてパウロはそのいのちをも、神にささげる時が来たことを知ったのです。私は今や注ぎの供え物となりますと。先ほども言いましたが、このテモテへの手紙は、ローマの獄中で書かれました。同じように獄中で書かれたピリピ1：20－21でも、パウロは自分の死が間近に迫っているとこのように述べています。「：20 それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。：21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」

②私が世を去る時はすでに来ました。

今の自分を見てパウロは二つ目には「私が世を去る時はすでに来ました。」と述べています。この「世を去る」と言うことばには、「出立」を意味するギリシャ語—アナリュシスが使われています。このことばがどのような時に使われたのかというと、船が航海のために岸壁から離れていく時、また兵士が前進するために居た所のテントを引き払う時に使われていました。それが「出立」で、ここでは「世を去る」と訳されています。パウロにとってこの出立の時は、今のすべての束縛から解放されて、(もちろんこの時パウロはローマの獄中にいましたが) 栄光にあふれた新しい地への出発の時と考えていたのです。ピリピ3：20には「私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」と書いています。パウロも天の御国を見上げていました。また旧約の信仰者たちも、天の御国に入ることをあこがれていたとヘブルの記者は私たちに教えています。ヘブル11：16aに「しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。」と記されています。パウロもまた旧約の信仰者たちも、そして私たちにとっても同じです。私たちのこの肉体の死、それは天国への旅立ちの時であり、また主にお会いすることができる喜びの時でもあるのです。パウロは今の自分の状況を見て、自分には死が迫っていること、しかしその時は主とお会いすることができるすばらしい祝福の時であると、この6節で述べているのです。

## 2. パウロ—過去の自分— 7節

パウロは次に7節で、過去の自分について述べています。「私は勇敢に戦い走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」と。パウロはこの7節で、完了形の動詞を三つ使って、過去の自分の歩みを振り返っています。「戦」った、「走り終え」た、「守り通し」た、ということばです。

### ①勇敢に戦った。

まず、パウロが自分の過去を見つめて言った「勇敢に戦」った、ということばを見ていきます。戦場にある兵士は目の前の敵に立ち向かい、味方のためにいのちさえ惜しまずに戦う者たちです。パウロはそんな兵士の姿を思い浮かべてこのように書き記したのかもしれませんが。パウロは戦場の兵士が勇敢に戦う者であるのと同じように、自分も勇敢に戦ってきたと述べています。そして、このパウロの戦いは、信仰の戦いであったということです。パウロはIテモテでテモテにこう述べています。Iテモテ6：12「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。」パウロはさまざまところで、人からの攻撃を受けました。しかし、そのようなパウロにとって最大の敵はサタンであり、悪霊たちでした。霊の戦いがパウロにとっては戦いであったのです。そのことをパウロはエペソ6：12で、「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」と述べています。

#### a. サタン

サタンは常に神への敵対者です。また神の計画を破壊する者です。聖書の中では、彼はこの世を支配する者、あるいは、空中の権威を持つ支配者、と呼ばれています。そして、サタンはこの世の支配者として食いつくすべき獲物を探し求めている、とペテロは私たちに教えています。Iペテロ5：8「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」皆さん、私たち人間の罪の始まりはどうだったのでしょうか？神が良きものとして造られたアダム。そのアダムとエバを蛇が誘惑したのです。彼らに、神に従わない思いを起こさせたことが、創世記3章に記されています。パウロは実際に霊的な戦いをしていたのです。サタンと戦い悪霊たちと戦っていました。

#### b. パウロはいつも自分に力を与えてくださる方を知っていた

しかしパウロはいつも自分に力を与えてくださる方を知っていました。そしてこの方は旧約時代にも信頼する者たちに力を与えられたことが記されています。ヨシュア1：9に「わたしはあなたに命じたのではない。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、【主】があなた

の行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」と記されています。旧約の信仰者たちも神から力を得たのです。同じようにパウロも「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」とピリピ4：13で述べています。パウロは勇敢に戦いました。パウロは主の御力を武器とし、そして神の武具を身に付けて勇敢に戦ったと述べています。

## ② 走るべき道のりを走り終えた

a. パウロは主によって備えられた自分の道を終わりまで走りぬいたと言う

### 主の備えられた道

過去の自分を見たパウロ、二つ目のことは、「走るべき道のりを走り終えた」ということです。「走るべき道のり」とは、「走る必要のあった道のり」また「走らなければならなかった道のり」のことです。パウロは「主によって備えられた自分の道を、終わりまで、それることなく走り抜いた」と述べているのです。イエス・キリストを主人として、その主人に仕える者として最後まで走ったというのです。パウロに対する主の備えられた道がどういうものであったのかは使徒9：15－16に記されています。「：15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人是我の名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。：16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」「わたしの名を異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶわたしの選びの器です。」と主が言われています。ご存じのようにパウロは使徒として、復活された主から遣わされました。「使徒」とはギリシャ語—アポストロス これは「使者」「大使」また「特別な使命を帯びて派遣された者」のことです。パウロはIコリント15：9－10このように述べています。「：9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。：10ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」この10節の中に「神の恵み」ということばが三回も出てきます。パウロは、自分が使徒となったのは神の恵みによる、と述べた後で、その使徒としての働きも神の恵みによったのだ、と記しています。皆さんは、パウロがどのように働かれたのかよくご存じです。パウロの伝道は、第一次伝道旅行から第三次伝道旅行までありました。この伝道の範囲は現在のトルコから海を渡ったギリシャ、そしてヨーロッパにまで及んだのです。考えてみてください。今の時代なら飛行機があり、車があります。数時間で行ける場所であるかもしれません。しかしパウロが生きていた時代、飛行機もなければ車もない。パウロは自分の足でこの広い地域を伝道のために赴いたのです。ジョームズ・M・ストーカーという神学者が、自分の著書の中でこのように記しているところがありました。神のご計画に従ってパウロは選ばれた、ということをおのうに述べています。「キリストの初めからの使徒のうちには、(中略)異邦人世界を大規模に回心させていくに必要な数々の賜物をあわせ持っている者がいなかったのである。彼らは、ガリラヤの漁師であり、自分の故国パレスチナで教え、伝道するのが精一杯であった。しかし、パレスチナの外には、ギリシャ・ローマの広大な世界が広がっていた。(中略)そのような所へ、福音のメッセージを持って出かけて行くには無限の融通性、教養、深い人間的な共感力、また包容力を備えた人物を必要とした。(中略)これほどの人は、キリストの一番弟子たちの中にはいなかった。しかし、キリスト教はそのような人を必要としていた。そして、その人はパウロにおいて見出されたのである。」(新版パウロ伝より)

b. パウロの信仰生活は苦難や困難の連続であったが、パウロの心はいつもイエス・キリストによって満たされていた。

使徒として召されたパウロでしたが、その歩みは順調ではなかったのです。パウロの人生、それは苦難や困難の連続だったとみことばは教えています。しかし、心はいつも主イエス・キリストによって満たされていた、とパウロは言います。ピリピ4：11－13をお開き下さい。「：11 乏しいからこう言う

のではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。:12 私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。:13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」苦難や困難な状況の中にあっても喜びと感謝を持って自分に備えられた人生をそれることなく走り終えた、とパウロは述べています。この箇所を読んで、私は自分も自分の走るべき道のりを走り終えたいと切に思います。おそらく皆さんも同じ思いを持って一日一日前に向かって走り続けているのではないのでしょうか。

### ③信仰を守り通した

三つ目は、「信仰を守り通しました」と。この「守」る—ギリシャ語でテレオーということばは「見張る」という意味を持ったことばが使われています。それは正しい道からそれないように注意深く見張る、そのような意味を持っています。また、信仰とは、罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主として、自分の主として受け入れ、その方に従うことです。これが信仰です。信仰には、私たちの能動的な行いが伴います。救われた後、何もせずに信仰を守り通すことは不可能です。ヤコブはこのように言います。ヤコブ 1 : 22 「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはいけません。」と。また、私たちの救いには神の目的があることを知り、主の助けによってその信仰を守り通すことが大切です。パウロはエペソ 2 : 10 で「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」と記しています。私たちが主によって救われ、新しい者とされたには目的がありません、とパウロは教えます。「それは良い行ない、主が喜ばれる行ないをすることだ」とパウロは言うのです。パウロは主イエスキリストを愛し、そしてみことばに従って自分の信仰を守り通したと述べています。

## 3. パウロ—未来の自分— 8 節

### ①義の栄冠が私のための用意されている

今を見、また過ぎた過去を見たパウロは、8 節で未来の自分を見てこのように記しています。「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」2017 年度版の聖書をお持ちの方は、「今からは」のところは「あとは」と違う文言が書かれていると思います。「あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。」この「用意されているだけです」は「残されているだけです」ということです。ですからパウロは未来の自分を見て、「あとは、義の栄冠が私のために残されているだけです。」と言うのです。

### ②義の栄冠を正しい審判者が与えてくださる

そして二つ目は、その「義の栄冠を正しい審判者が与えてくださる」と述べています。この「義の栄冠」とは、義なる人に与えられる栄冠、報いのことです。救われて、主の命令に従ってこの地上での人生を歩んだ者に与えられる栄冠です。ウィリアム・バークレイはこの栄冠についてこのように註解していました。「ギリシャの競技では最高賞は月桂樹の冠であった。勝利者はその冠をいただいた。この冠を頭に乘せてもらうのが参加選手の最高の栄誉であった。」

#### a. 正義をもってさばかれる方

パウロにとってもこの義の栄冠をいただくことが、大きな希望だったのです。もちろん、パウロはその栄冠を与えてくださる方を知っていました。先ほども言いましたが、パウロはこの時、ローマの獄中にありました。ですから自分をさばく者は、当時のローマ皇帝ネロであることを知っていました。パウロ頭の中には、実際に自分をさばく者と、未来において自分にすばらしい義の栄冠を与えてくださるその

さばき主としての主を比較していたのかもしれませんが。この正しい審判者は、正義を持ってさばかれる方です。

b. 各々に報いを与えてくださる方

そしてこのようにふさわしい報いを与えてくださる方です。8節の後半はこのように書かれています。「私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」皆さん、アーメンですね。主の現われを慕っている人たちに分け隔てなく与えられるこの義の栄冠は、主の再臨を待ち望んでこの地上を歩んでいるすべての者たちに与えられる、主からの報いです。「喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからだ。」とマタイ5：12に記されています。また聖書の最後である黙示録22：12には「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」と記されています。それぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来るのだと。

○パウロの今、過去、未来はあなたに何を教えてくれていますか？

きょう、私たちはⅡテモテから、パウロが自分の今を、過去を、そして未来を、どう見ていたのかを学びました。パウロは死に直面していましたが、その時を、新しい地への出発の時であると知っていました。そして今に至るまでの自分の歩みを、私は勇敢に戦い、主が備えてくださった道をしっかりと走り抜き、主イエス・キリストを信じる信仰を守り通し、あとは主からの報いである義の栄冠だけが私に残されている、と述べています。私は先日74歳になりました。私より年配の方がこの教会にはたくさんおられます。おそらくその方々も、私と同じような思いを持って一日一日を過ごされているのではないかと思います。その思いとは、主にお会いするその時が一日一日と近づいて来ているなということです。このⅡテモテは、パウロの最後の手紙です。そして、この手紙は私にとって、自分の信仰を吟味するすばらしい恵みのことばとなりました。私のような年配者だけでなく、おそらく若い人たちにとってもこのパウロの最後のことばは、自分の信仰を吟味する上で有益なことばではないでしょうか。皆さん、パウロがどのように思い、自分の過去をどのように見つめ、そして、これから来るであろう未来をどのように思ってⅡテモテを書き記したのか、もう一度しっかりと見てみましょう。